

幾山河

第24号

平成23年 5月15日
発行
社団法人沼津牧水会

目次

牧水の酒の歌	2
日向に集う牧水ファン	7
第9回 若山牧水顕彰 全国大会に参加して	8
第57回 沼津牧水祭	
短歌大会	14
碑前祭・芝酒盛	15
第23回 雛の歌会	16
文化講座	17
サロン音楽の夕べ	18
平成22年度事業報告	19
定款・編集後記	20

牧水の酒の歌

佐佐木幸綱

一

若山牧水の酒の歌について考えてみたい。

牧水は、酒の歌の歌人として知られている。歌数も多い。沼津牧水会発行『牧水 酒のうた』によると三百六十七首。この数は『若山牧水全集』に採録された全短歌作品にあたり、そのうえに、確認されている自筆の色紙等の作品を合わせた数字である。

歌数だけをとりあげれば、もつと多い例があるかもしれない。たとえば、吉井勇は七十年代半ばまで生きているし、かなり多いはずだ。それでもやはり酒の歌は牧水という定評があるのは、作品的魅力によるだろう。その作品的魅力の正体は何なのか、そのあたりを考えてみようというのである。

二

簡単なクイズからはじめよう。

牧水には一人で飲む酒の名歌がたくさんある。有名な歌はほとんど一人飲む歌といっていい。しかし、一見、一人酒の歌のようであ

りながら、じつは友人たちといっしょの酒に取材した歌も少なくない。そんな事情を思い浮かべつつ、次のなかで一人酒ではない酒の歌はどれかを当ててほしい。

- ① 白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ 『路上』
- ② まさむねの一合瓶のかはゆさは珠にかも似む飲まで居るべし 『路上』
- ③ かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ 『死か芸術か』
- ④ 時をおき老樹の雫おつるごと静けき酒は朝にこそあれ 『砂丘』
- ⑤ 酒二合飲みき早や寝むいないなさびしいま一合を飲むこととせむ 〈歌集未収録〉
- ⑥ 酒のめばなみだながるるならはしのそれもひとりの時に限れる 『白梅集』
- ⑦ 鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわれも寝む 『山桜の歌』

お分かりだろうか。答えを先に書いておこう。ここでは一応、④を正解としておきたい。

④は、いかにもゆつくりと一人で朝酒を飲

んでいるような歌だが、歌集『砂丘』では「友と相酌む歌」八首の中におかれている。一人酒ではないというのだ。一連の最後、八首目に、

那珂川に生けるうろくづ悉くくらへとわれに強ひし君かも 『砂丘』

という歌があつて、那珂川という川の名が出て来るので、大正四年夏に栃木県の喜連川に「創作」の歌仲間・高塩背山をたずねたときの歌だということがわかる。那珂川の魚を全部を食え、という歌があるほどだから、山ほど那珂川の鮎を食ったのだろう。



那珂川の築場（那須烏山市提供）



創作社大会での記念写真（大正三年三月牛込清風亭）
最後列右から二人目が高塩背山、前から二列目左から二人目が牧水

飽かずしも酌めるものかなみじか夜を眠ることすらなほ惜みつつ
幾日かけ幾月かけてねがひつる今宵の酒ぞいざや酌みてな
朝は朝昼は昼とて相酌みつ離れがたくもなりにけるかな

一連中のこれらを読むと、高塩背山が気のあう仲間だったことがよくわかる。ともに尾

上柴舟に選してもらった兄弟弟子の關係にあつた人物だ。牧水は生涯に三回も喜連川にこの人を訪ねて痛飲している。大正四年夏のことは「喜連川」というエッセイ（『旅とふる郷』所収）にも書かれていて、④の歌は親しい友人との酒をうたつた歌だったことが分かるのである。

他の歌はどうか。⑥には「独酌」、そして⑦には「深夜独酌」という注記がわざわざ付けられている。

⑦の歌などは、友人たちと飲んで、「そろそろ眠くなってきたな」と呼びかけた歌とも読める。そう読まれないように、わざわざ注記を付けたのだらう。

①②③⑤については、じつはよく分からない。牧水は第八歌集『砂丘』（大正四年刊）以後は、作歌事情を踏まえた詞書や注記を付すようになるのだが、それ以前、第七歌集の『秋風の歌』まではほとんど詞書や注記がない。だから、一人酒の歌のようでも、じつは友人といつしよの酒に取材した作かもしれないのである。

三

牧水の歌は、現実の時間空間にしばられない抽象的なうたい方がされている。同時代の

短歌でも、「アララギ」系の歌が時空を具体的に表現して、取材した場面との關係を明確にしているのと逆である。だから、牧水の歌は、歌集の中の置かれた場所によって多様な読み方ができる。

有名な例をあげれば、例の「白鳥は……」の歌。この歌、歌集「別離」では

女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ、
われその傍らにありて夜も昼も断えず歌ふ
という詞書のもと恋歌七十六首の中におかれている。つまり歌集では、バックに恋のムードが流れる青春歌だと読める。

しかし、この歌ができた事情は恋とは無關係だつたらしい。初出は雑誌「新声」の明治四十年十二月号。牧水が園田小枝子と千葉県外房州の根本に行つたのは明治四十年十二月末から翌年一月はじめだつたから、この歌が雑誌に発表されてから後ということになる。雑誌発表時には次のような恋愛ムードとは無關係な作と一緒だつた。

富士よゆるせ今宵は何の故もなう涙はて
なし汝を仰ぎて
『別離』

日が歩むかの弓形ゆみかたのあを空の青ひとすぢ
のみのさびしさ
『別離』

雑誌「新声」に発表されたときと、歌集の中とは「日鳥は……」のニュアンスがちがう。歌集収録時に恋の歌の文脈の中に置かれることによって、この歌は断然精彩を得たと言っている。（この歌は歌集『海の声』にも収録されていてそこでは詞書がない。これについてはここでは触れない。）

なぜ、そういうことが可能なか。牧水の歌の、時間空間に縛られることのない抽象性そして象徴的性格が、置かれる場によってその物語に歌を染まらせることを可能にしているからである。

この点は、牧水の歌の大きな特色であり、彼の酒の歌の魅力にも大いに関与しているはずである。

四

牧水はエピソードの多い歌人である。たくさんある牧水のエピソードが、彼の酒の歌に関与する。牧水にエピソードが多いのは、牧水が回りの人に細やかな気配りができる人物だったから、心を許してつきあう人が多かったからだろうと思う。酒を飲むと傍若無人になる者がいる。牧水はそうではなかった。人柄のいい人物だったようだ。

もう二十数年昔になるだろうか、牧水の長

男・若山旅人さんと最初にお目にかかったときの話が忘れられない。雑誌「創作」で「牧水賞」を新設したいという話でお会いしたのだったと思う。リーガロイヤルホテルができる前、早稲田の大隈庭園内にあった書院の喫茶室でお会いした。その折に牧水が家庭内でも気配りの人だったことを知った。

家の新築のための借金をかかえて経済的に困窮していたにもかかわらず、牧水は自分たち子どもに全くそれに気付かせなかった、というエピソードを旅人さんは話された。

牧水の死の直後、沼津中学の担任教師に呼ばれて、「君は大学は断念して、できるだけ早く就職すべきだ」と告げられたという。旅人さんはその時はじめて若山家の経済的な事情を知ったらしい。「子供にはせんせん貧乏のそぶりも見せませんでした」。子供に心配をかけるまいとするやさしい配慮だったのだろう。

「創作」の「若山牧水追悼号」（昭和三年二月号）には、そうした牧水のやさしい気配りのある人柄に言及したエピソードがたくさん載っている。

妻・喜志子の「病床に侍して」。家庭内での気配りの数々はこうだ。いくら体調が悪くてもかならず皆といっしょに茶の間で膳に向かった話。妻や看護婦が夜中にずつと起きて

いなくていいように呼び鈴を買わせた話。他界する前日の九月十六日、見舞いに来てくれた人たちに失礼がないように、沼津まで来てくれたのだからご馳走を出すように気づかった話。白秋が来たらぜひ泊まってくれようと言った話。白秋が来たらぜひ泊まってくれようと言った話。死の前日まで気づかいをやめなかった話が列挙されていて、牧水の人柄をしのばせる。

このような人柄と、独特な風貌。両者が重なりあって人に親しみをおぼえさせ、多くのエピソードを呼んだらしい。

牧水の風貌について書いているのは萩原朔太郎だ。「百姓然たる風貌」「田園的な野性」「牧歌的な風貌」「粗野な風采と態度」「田舎者ムキ出しの牧水氏」……。牧水という人物の印象をこう列挙した上で、「何となく物なつかしく、いつでも逢ひたいやうな親しみを感じてゐた。端的に言ふと、僕は実に牧水氏の人物が好き





後列右から2人目長谷川銀作、前列右端が潮みどり、
後列右端が牧水（大正9年沼津香貫の家にて）

だつたのだ」と書いている。悪口のようなだが、じつはそれが親しみ、懐かしさの根源だ、という意味に読んでいい。さすが、朔太郎だと思ふ。

牧水の人柄、風貌、いでたち、酒の欲し方、飲み方、酔い方等、数多くの人になつかしく親しみをこめて語っている牧水のエピソード。牧水の酒の歌は、こうした牧水という人物の物語に染まってその魅力を形成しているのである。

「創作」の「若山牧水追悼号」にはもちろん、酒を飲んだときのエピソードも多くの人が書いている。牧水の媒酌で、喜志子の妹・潮みどり（この女性も歌人だった）と結婚した「創作」の歌人・長谷川銀作は、

のめといふ飲まなきや一つ書けといふこの吉弥はいとしかりけり（歌集未収録）

とうたわれた吉弥という芸妓と、横浜磯子の料理屋で飲んだときのエピソードを書いている。（長谷川銀作の文中では「書けと言ふ書かねばもひとつ飲めと言ふ吉弥が顔に見とれるかな」となっている。）

吉弥にせがまれて三味線の胴にこの歌を書いたあと、二人はべろべろに酔って帰路につく。「尻つばしよりの牧水とぼくとは相抱き手振り足振り相歌ひ怪しき踊りを踊りつゝ歩み、とう／＼八幡橋まで踊り続けた。そしてその踊りは市電に乗つてからもやめなかつた」。大正時代半ばのことである。現在とちがつて、酔っぱらいに寛大だった時代の話である。

もう一つ、長谷川銀作が書いているエピソードを紹介しておこう。

ある時、相当に酔っぱらってから、牧水が急に「これから結婚式に行かねばならない。仲人をする約束だ」と言い出した。羽織も袴もつけていない。仕方がないので、いっしょ

に飲んでいた男の袴と長谷川の羽織で間に合わせて出かけていった。後で聞いたところでは、式場で立っていられずに幾度も倒れたが、起き上がる毎に踊り出して誤魔化したのだという。もう滅茶苦茶である。

現在では響（ひびく）感（かん）を買うばかりだろうが、当時は愛嬌（あいぎょう）として許されたのだと思う。酔っぱらい天国の時代だったのだ。

五

最後に、牧水の、これから酒を飲もうとする寸前の作を引用する。若山牧水という名前が付されたこれらの歌を何度か繰り返して読んでゆくと、牧歌的な風貌、気配りの人のイメージ、そして数々のエピソードが、歌にオーバーラップしてくるのに気づく。滅茶苦茶に酔うだらうまでの何時間か。そのあいだの酒を愛する者の陶酔的な息づかいを思い浮かべつつ、歌を読んでいる自分に気づくだろう。歌が独り歩きをして、牧水という物語を呼び寄せているのである。

三階の玻璃窓（はりまど）つつみ煤烟（ばいえん）のほへるなかにひとり酒煮る
『路上』

かへるさや酒の飲みたくなりゆくをしつとはぐくみ居るよ電車に『死か芸術か』

酒戦たれか負けむとみちのくの大男ども
い群れどよもす 『朝の歌』

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺
は立ちて待ちをる 『黒松』

牧水の酒の歌は、牧水という物語を呼び寄せる力を持つ酒の歌なのである。

『付記』

現代短歌では、作品と作者は切り離して読む読み方が主流になっている。作品がよければそれでいい。どんな作者が作ったかは関係なしとするのである。

たしかにこの読み方は正しい。作者についての情報をもつていてもいなくても、同等の読みができるからである。この読み方ならば作者について情報のない古典短歌も同等に読める。作者を知っているか知らないかで、作品の読み方が変わってしまったては、作品の正確な読みは保証されない。友人の歌でも、詠み人知らずの古典でも、同じように読み込まれてしかるべきである。

一般論としてはこの通りなのだ。が、しかし、近代短歌史の一時期は、作者と作品を重ね合わせる読みで読める歌をよしとし、またそういう読みが一般的だった時代があった。

短歌革新運動期から前衛短歌運動期までの時代、つまり明治二十年代後半から昭和二十年代半ばまでである。

石川啄木には十数枚の写真がある。が、笑っている写真は一枚もない（そう言えば、牧水にも笑っている写真はないのではないか）。もし一枚でも明るく笑っている写真があれば、啄木の歌はもっと明るいイメージで読者に迎えられるはずだ。啄木の歌も、啄木という人物の物語を呼び寄せているからである。

ここは、それを論じるところではないからこの問題に深入りしない。牧水がその時代の歌人だったことを指摘すればそれで足りる。牧水にとつての作歌は、作者（われ）と作中の主人公（われ）との距離をゼロに近づけようとする行いだったのである。

（注）創作社の「牧水賞」は、大岡信、加藤克己、佐佐木幸綱、竹中皆二、若山旅人の各氏が選考委員となつて昭和六十二年に新設された。第一回受賞者は前年に亡くなられた宮格二氏。その後、谷邦夫、齋藤史、玉城徹の各氏が受賞されたが、平成三年に若山旅人さんの奥さまがお亡くなりになったこともあって、残念ながら、四回で終了してしまった。なお、平成九年に、宮崎県等の主催する「若山牧水賞」が創設されることになったのはご存知のとおりである。

『筆者プロフィール』 ささき ゆきつな

昭和十三年東京生れ。「心の花」主宰。日本芸術院会員。日本ほろよい学会会長。朝日歌壇選者。早稲田大学名誉教授。若山牧水賞選考委員。歌集に『群衆』『金色の獅子』『滝の時間』『旅人』『吞牛』『アニメ』『逆旅』はじめての雪『百年の船』等。評論に『萬葉へ』『柿本人麻呂ノート』『男うた女うた男性歌人篇』『万葉集の（われ）』など多数。現代歌人協会賞、詩歌文学館賞、逄空賞、若山牧水賞、斎藤茂吉短歌文学賞、芸術選奨・文部大臣賞、山本健吉文学賞、現代短歌大賞等を受賞。平成一四年紫綬褒章受章。本会刊『牧水 酒のうた』に「解説」を執筆。



平成 19 年 9 月開催の「日本ほろよい学会」沼津大会で『牧水 酒のうた』を手に牧水の酒の歌について語る筆者



日向に集う牧水ファン

平成二二年一〇月二三日(土)二四日(日)の両日、若山牧水生誕一二五年・日向市東郷町若山牧水顕彰会設立六〇周年を記念して、日向市・日向市教育委員会・日向市東郷町若山牧水顕彰会・あくがれの会の主催で『牧水再発見! 牧水の心をたずねて』の大会テーマで「第九回若山牧水顕彰全国大会」が開催され、沼津から青木朝子、浅井治、勝又十枝、金子安夫、小出和夫、千野慎一郎、長澤靖夫、林茂樹、原悦子、三宅芳則、大島葉子の十一名が参加した。

二三日正午過ぎ、日向市中央公民館で坪谷小学校児童による牧水短歌合唱で開幕し、大会会長の黒木建二日向市長と東村吉市日向市東郷町若山牧水顕彰会会長から歓迎の挨拶があった。つづいて、佐佐木幸綱、小島ゆかり、伊藤一彦の三氏による「牧水と現代―牧水の再発見―」と題した鼎談が行われた。

式典終了後、バスに乗って、米の山、馬ヶ背、御銚ヶ浦、日向市駅にある牧水歌碑をめぐり、レセプション会場のベルフォート日向に到着した。

夕方からのレセプション「牧水を偲ぶ会」には、約一四〇名が出席し、日向市の焼酎「あくがれ」や延岡市の清酒「千徳」を酌み交わしながら、時の経つのも忘れ、旧交を温め、交流を深めた。

翌二四日は、東郷町坪谷の牧水公園ふるさとの家に会場を移し、牧水サミット、ステージイベントが開催された。生憎の雨模様になり、屋外でのイベントは中止になってしまったが、伊藤一彦日向市若山牧水記念文学館館長、榎本肇子沼津市若山牧水記念館館長の挨拶の後、坪谷神楽保存会による「坪谷神楽」が披露された。「牧水をつくりさんコンテスト」につづいての「私の好きな牧水の歌とその思い」の入賞作品の表彰では、牧水似を自他ともに認める田原大三東京牧水会会長が入賞し、会場は大いに盛り上がった。二日間を通して、約五五〇人の参加者があり、盛会裡に終了した。

第九回 若山牧水顕彰 全国大会に参加して

長 澤 靖 夫
(前沼津市教育長)

小倉駅にほど近いホテルで目覚め、朝食をとり一階フロアーに降りて行くと、フロント前で慌てた様子の金子安夫沼津牧水会元事務局長に出会った。「何をそんなに慌てているの」と問うと、「今から小倉駅に行つて電車の発車時間を数分遅らせてもらうよう交渉に行つてくる」と言い、ホテルを慌ただしく飛び出して行つた。レストランに行くと、他の会員たちが集まり朝食をとっていたので、その旨を言うと、理事長たちの乗車した寝台列車「サンライズ瀬戸」の二本前の電車が鹿が何かの動物を撥ねたため、大幅な遅れが生じてしまった。少しでも早く着くようにと姫路駅で新幹線に乗り換えて来るという。それでも小倉駅八時三十四分発「にちりんシーガイア7号」には、二、三分間に合わないのので、発車を遅らせてもらうよう交渉に行つたとのことであつた。それを聞き瞬間無理だと思つた。日豊本線は大分県内はほぼ複線化になつてゐるが、宮崎県に入るとまだ単線のままである。したがつて一本の電車を遅らせるだけでは済まず、すれ違ふ上りの電車すべてを時間調整

しなければならぬからである。予想どおりというか当たり前のことであるが、無理だつたと言いつながら金子さんが戻つてきた。
平成二十二年十月二十三日、二十四日の二日間、第九回若山牧水顕彰全国大会が宮崎県日向市で開催されるため、沼津牧水会から理事長以下十一名の会員が参加した。

参加に当たり、前日の二十二日に特別の用事がない「用無し組」は、早朝の新幹線で小倉へ向かい、小倉城など市内を散策し、翌朝の特急で日向入りすることになっていた。一方、前日どうしても休みを取ることの出来ない「用有り組」は、大会当日の始発便の飛行機で宮崎入りしても間に合うのだが、何せ鉄の塊が空を飛ぶとは、自然の摂理か、はたまた神(仏?)の教えに反すると主張し、前日深夜発の夜行列車となつた次第である。したがつて「用無し組」と「用有り組」は小倉駅で合流して大会に臨むよう事務局は計画したのである。そこに件の事故が発生し、「用有り組」は、次発の特急電車に余儀なくされ、大会には少々遅れての参加となつた。

ひととき美しいボーイソプラノの歌声が日向市中央公民館の会場に響き渡つた。かつて牧水が学んだ坪谷小学校の児童二十二名が、開会に先立ちオープニングセレモニーとして牧水短歌を全員で合唱した。前席に座つていた人が隣席の人に話し掛けてゐるのを小耳に挟んだ。

それによると、毎日牧水の歌を朗詠し、練習に励んでゐるとのことである。牧水の心を感じて歌うからこそ、聞く人々の心を捉え感動させる唄声であることに納得した。





記念撮影（米の山の牧水歌碑前にて）



記念撮影（馬ヶ背の牧水歌碑前にて）



記念撮影（御鉾ヶ浦の牧水歌碑前にて）



記念撮影（日向市駅の牧水歌碑前にて）

大会は開会式に続き「牧水と現代——牧水の再発見——」と題して、佐佐木幸綱氏、小島ゆかり氏、伊藤一彦氏の三者による鼎談が始まった。その中で、特に印象に残った指摘を紹介する。

一つは、現代という時代において、牧水を詠む視点を述べる中で、「牧水短歌は耳で感じる歌であり、現代短歌は字で感じる歌である」という指摘である。私は以前から牧水の歌を耳にすると、その情景や空間の再構成力の高さを感じていたが、まさにそれを裏付ける指摘であった。このことから考えると、歌碑を設置し顕彰することも大切ではあるが、朗詠

を通して後世へと継承し顕彰していくことも大変重要であると示唆しているのではないかと感じた。二つ目は、牧水の歌には一つの短歌に鳥の名や草木の名が複数入っていることが多い。他の作家にはほとんど見られない現象で、牧水は個性性を重視していることが伺える。しかしながら、現代の子供たちは魚の名前や植物の名前をほとんど知らない。このことは、現代的課題である「地球を大切に」に添わない。雑草や小鳥で片付けるのではなく、それぞれの草の名前や小鳥の名前を知ることが、実は「地球を大切にすることの原点である」という指摘に共感した。

日向市中央公民館におけるプログラムも終了し、参加者全員が数台のバスに分乗して歌碑めぐりを実施した。米の山、馬ヶ背、御鉾ヶ浦、日向市駅を回り、宿泊先であるベルフオート日向に着いたのは五時過ぎであった。



各部屋で一休みした後、夕方六時からベル
フォート日向内のレセプションホールで、
「牧水を偲ぶ会」が開かれ、久しぶりの再会
を喜び合った。



黒木建二 日向市長と佐佐木幸綱氏
(二次会会場にて)



元秋田市長 石川錬治郎氏

国東紀行

大会二日目は、会場を移し坪谷の里で「東郷ステージ」と称して開催された。計画では牧水生家周辺の特設ステージでイベントを行う予定であったが、生憎の雨模様であったため、急遽、牧水公園「ふるさとの家」で行った。そのようなことから、坪谷臼太鼓など幾つかのプログラムが取りやめになったのは残念であったが、坪谷神楽保存会の神楽の舞は、珍しくもあり、楽しく鑑賞した。



続いて行われた「牧水そっくりさんコンテスト」は笑いの中で進行されていき、参加者の投票によって一席が決定した。優勝したそっくりさんは、ダイエットに失敗した牧水というイメージであった。この「牧水さん」は市の職員で、文化課長あたりに懇願か脅迫されてのエントリーではなかったかと思われる。兎も角、和やかなうちに二日間の日程は成功裡に終了した。

ところで、この大会に参加するに当たって、一つ危惧することがあった。それは、牧水の生まれ故郷である東臼杵郡東郷町が平成十八年に日向市に併合されたことである。これまで市町村合併を実施した日本の各地において行政のスリム化の名の下に、それまで市民によって営々と培われてきた生活文化が切り捨てられてきた様を随所に感じており、旧東郷町の牧水顕彰も合併とともに縮小衰退していくのではないかと危惧していたのだ。しかし、大会に参加してその杞憂は一蹴された。この牧水顕彰全国大会を日向市が全面的にバックアップし、中でも大会二日間すべての行事に黒木建二市長が参加されたことに驚くとともに、市長の市民文化に対する熱い思いに感激し、日向市における牧水顕彰もさらに発展して行くことが実感された大会であった。

「どこか良いところがあったら計画してほしい」と林理事長から依頼があった。牧水全国大会が九州や中国地方で開催される時には、折角遠隔の地に赴くのでと、数日日程を延長して小旅行を行ってきた。今回も同様に実施することとし、そのツアーコンダクターを務めるよう下知があった。そこで私は、日向からの帰途立ち寄る適地は何処が良いか思案し、国東半島めぐりを計画した。ここを選んだ理由は、以前二回ほど訪れているが、その時感じたことは交通が大変不便な所との印象であった。したがって参加者の皆さんもその機会が少ないのではないかと思い決定した。

私たちは有志七名（浅井治、小出和夫、長澤靖夫、林茂樹、原悦子、三宅芳則、大島葉子）は大会終了後、特急「にちりん」にて大分県入りし、杵築市が特定非営利活動法人に管理委託している関係か、リーズナブルでありながら優雅で癒しのある山香温泉「風の郷」に夕刻到着した。「風の郷」での晚餐会は、料理長自慢の懐石料理と地酒に堪能し、会話も弾み有意義な一夕を過ごすことができた。翌朝、チャーターしたジャンボタクシーに



熊野磨崖仏の前で記念撮影

乗り、先ず熊野磨崖仏を訪れた。鬼が一夜で積み上げたと言われる自然石を乱積した磨崖仏までの石段は三百米も続き、生憎小雨が降ったり止んだりの天候であつたので、荒行のごとき状況であつた。中でも着物に下駄の理事長とやや鉄分不足気味のマドンナは、濡れた石段で悪戦苦闘していたが、誰もが認める意志強固な両人は何のそのと踏破した。



自然石を乱積した石段にて

次に真木大堂と両子寺を訪れた。真木大堂は、国東半島一帯の寺院群の本山であり、また日本一大きい大威徳明王像があることでも有名である。幾つかの仏像に圧倒されはしたもの、江戸時代に建立された本堂と九駆の佛像を祀つてある大きな近代的収蔵庫とのアンバランスな景観に些か違和感を感じた。両子寺は国東半島のほぼ中央に位置する両子山



富貴寺大堂の縁に並んで記念撮影

の中腹から山頂にかけて細長く奥行きのある境内に堂や塔が点在している。私たちは、熊野磨崖仏での疲れもあり、山登りは中止し、山門付近を散策するにとどめ、昼食後に富貴寺を訪れるため、早めに両子寺を後にした。

昼食は、富貴寺近くの蕎麦で有名な旅庵「落莖」の「落郵」でとった。予約の折、新蕎麦でお願いしたところ、組合の規定で、十一月一日からでない新蕎麦は出せないとの返事であった。何とかならないかと交渉した結果、新蕎麦粉に一割だけ昨年の粉を混ぜれば、規定に反しないので、それで打たせてもらいます。と解ったような解らないような返事であった。当日、その特別配合のざる蕎麦を食したが期待通り大変美味であった。

富貴寺では、数十段の石段を登ると、山裾を削った平地に建てられた平安建築として名高い国宝大堂が見えてきた。しかし、生憎この日は、年数回の点検清掃の日に当たり、堂内にある壁画や阿弥陀如来などの重要文化財を見ることが出来なかった。それでも折角訪れたのだからと、大堂の縁に一列に並び記念のシャッターを切った。その後、私たち一行は、最後の訪問地である宇佐神宮を詣でるため国東半島に別れを告げた。

宇佐神宮は、全国一の神社数を有する八幡宮の総本社であり、その境内は広大である。表参道入り口から本殿までは一キロ以上あり、帰りの電車の時刻から考えて、ゆつくり時間を取る事が出来なかった。そんなことから、皆さんに少し急いで参拝するようお願いした。



宇佐神宮にて

ところが、誤算が生じた。表参道には数多くの様々な店が並んでおり、それぞれがお店探訪を始めてしまった。ここまで来て、千数百年前に建てられた国宝本殿を見ずして帰るわけにいかず、とにかく急いで参拝してもらった。

どうか宇佐駅には予定の十分ほど前に到着することが出来た。間に合って良かったとほっとしていたところへ、一行の一人三宅さんから「急がせたけど、まだ一時間以上あるよ」と言われ、初めて気がついた。昼食時間を予定より多く費やしてしまったので、ここでの見学時間を縮小せざるを得ないの思い

が、時間の誤認に繋がったようだ。宇佐にはガン汁という郷土料理がある。これは、川蟹を碎いて濾したスープに高菜を入れたものである。以前、参道にある食堂で、旅の疲れを取ってくれた思い出があり、それを旅の終わりに味わってもらおうと考えていた。それも夢と儚く消えてしまい、ツアーコンダクター失格を痛感した国東紀行であったが、参加者一同、大いに楽しみを満喫した旅であった。



山香温泉「風の郷」での晚餐会
(左から大島、原、小出、三宅、長澤、林、浅井)

第57回沼津牧水祭短歌大会

十月三日(日)
午前十時三十分
千本プラザ音楽
ホール「松籟」

第57回沼津牧水祭短歌大会



第五七回「沼津牧水祭・短歌大会」は、講師に「星雲」編集・発行人の林田恒浩先生を迎えて、千本プラザ音楽ホール「松籟」で開催された。出詠歌一五一首、出席者八六名。午前の講演の演題は「かたはらにおく幻の椅子一つ——大西民子の歌と人生」でした。結婚するも男児を死産、やがて別居し離婚。母や妹の死と相次ぐ不幸の中で「波濤」を結成したにも拘らず、創刊号を手にした一週間目にこの世を去るという凄絶な大西民子の六十九年の人生を、林田先生は愛情をもって尊

敬の眼差で語り続けた。つづいて、林田先生作成の「大西民子作品抄」を基に鑑賞した。

かたはらにおく幻の椅子一つあぐがれて待つ夜もなし今は「まぼろしの椅子」

身を逼むる不文の掟思ふ夜もミモザがこぼす黄なる花びら「不文の掟」

てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る「無数の耳」

桃の木は葉をけむらせて雨のなか共に見し日は花溢れるき「花溢れるき」

総じて、大西民子の歌は難解と思われるが、ちであるが、非常に解り易く優しいと林田先生は述べ、大西民子は己れの不運に身を任せ、大自然の中で無心に在りたいと願い、身のめぐりを丁寧な観察し、光明を見出そうと歌に魂を燃やし続けたと語った。

「とどこほる雲のごときは差し措きて力ある者走り続けよ」(遺歌集「光たばねて」)のように、わが身は滞る雲の如きはかない命ながら、後に続く者たちに「力あるもの走り続けよ」と叫ぶ大西民子のおおらかな人間性をたたえた。

午後は、当日の出席者全員の詠草の歌評である。林田選として約三十数首を読み上げ「よい歌が多く、レベルが高い」「対象をよく見詰め、内容の深い歌を詠もうと努力し、

「の・し・て」などの助詞の用法に留意して推敲を重ねてほしい」と、全体評を語った。

牧水短歌について語った斎藤史の講演録「私が出遭った歌人たち」を当日の土産として配り、「ぜひ一読を」と薦めて、全講演を終了した。(本会会員 渡辺郁子)

講師選の「牧水賞」三首と互選賞上位三首

牧水賞一席 三島市 伊藤 純

片陰り片照る午後のすぎゆきを手無地蔵の無き手すずしも

牧水賞二席 沼津市 露木みつ江

吊るし雛幾日重ねし一つりをこの世にわれの在りし証しに

牧水賞三席 沼津市 森田小夜子

たんぽぽのごとき帽子が校門をわつと出てきて咲きひろがれり

市長賞 沼津市 森田小夜子

たんぽぽのごとき帽子が校門をわつと出てきて咲きひろがれり

市議会議長賞 駿東郡長泉町 勝又文江

兵たりし片鱗わづかのぞかせて童となりし夫の日々在り

教育長賞 沼津市 小林慧子

ただ一度終楽章にシンバルを鳴らす人のゐてオーケストラ成る

第57回沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十七日(日)午前十一時



一週間、気を揉んだ天気予報も、当日は曇りのち晴れ。沼津の秋の風物詩「沼津牧水祭・碑前祭」が栗原裕康市長、山崎篤市議会議長、工藤達朗教育長等沼津市政に携わる方々や牧水生誕地宮崎県日向市から谷村美江地域自治センター長、東京牧水会から田原大三会長、若山家から若山純氏など、来賓及び短歌と酒の愛好者約四百人が集って開催された。

大正琴の演奏で和やかな雰囲気が出される中、定刻午前十一時、式典は開会した。

開会の辞で、林理事長は「牧水そして沼津を愛する人たちが大勢集っていただき感謝する。秋のひとつき、お酒を酌み交わしながら、沼津の将来について語らっていただきたい。」

「沼津はよい処ですね! 沼津は牧水が終焉の地に選んだだけのことがありますね!」の期待にこたえて行きたい」と語った。

つづいて、栗原市長が「都市力を考えた場合、文化の力も都市力の大きな一つであると思っている。人口二十一万の沼津は文化の力がかかなりあると自負している。基となるのは牧水先生がこの地を選んでくれ、沼津と言えど牧水という精神文化が定着している。一層盛り上げていただきたい」と祝辞を述べた。

工藤教育長は「沼津の教育目標の一つに言葉を大切にしようを掲げている。俳句、短歌は究極的な文学で、今年も中学生が短歌コンクールに多数応募したと聞いてうれしく思っている。小さい時から言葉の基礎基本を身に付けることが、沼津を愛することに繋がるだろう。沼津の文化振興の礎となる沼津牧水祭の益々の発展を祈願します」と述べた。

そして、牧水の孫に当たる榎本篁子館長による「幾山河」歌碑への献花・献酒が行われ、

館長は、戦国時代の戦乱で荒れた千本浜海岸に松を植えた増誉上人(乗運寺の開山)の故事を語り、「樹木を愛した牧水が千本松原を守った縁で沼津の皆さまに愛されていることに、遺族の一人として感謝する」と語った。

花柳寿宗師による牧水短歌と長詩「枯野の旅」の日本舞踊が披露され、つづいて、「中学生短歌コンクール」の特選歌の表彰が行われた。式典の締めくくりは、恒例の「牧水のうた」を歌う会による合唱に聴き入った。

栗原市長、山崎議長、田原東京牧水会会長、谷村地域センター長、榎本館長の五人による清酒「牧水」の鏡割りのあと、山崎議長の音頭による乾杯で「芝酒盛」が始まり、名物のおでんと焼き鳥、焼きそばを肴に「牧水」を楽しむ賑やかな風景に変った。

岳清流沼津愛吟国風会が牧水短歌を吟じ、沼津観光ボランティアガイドの合唱と沼津ハーマニカクラブの演奏、更に「裾野五竜太鼓保存会」ようそろ」の力強い太鼓演奏が芝酒盛を盛り上げる定番となった。

恒例となった裏千家上村宗菊代表による野点席で頂戴する抹茶は、秋の風物詩を飾るに欠かせぬ心と和らぐおもてなしでした。

訪れた外国人をはじめ、参会者一同存分に楽しんだ一日でした。(本会会員 北村正昭)

第23回

雛の歌会

三月五日(土)
午後一時三十分
沼津市若山牧水
記念館ラウンジ



松平盟子先生(ブチ★モンド「主宰」)をお
迎えしての「雛の歌会」は、富士山も見ること
が出来て晴々とした歌会日和でした。

出詠された方は八十三人。当日の出席者は
六十八人。出席者の歌評をいただきました。
松平先生のさわやかなお声に聞きほれなが
ら心に残ったことを挙げてみます。

各々の作品についてというよりも、共通に
考えることとして示唆にあふれる言葉はたく

さんありましたが、特に記憶に残ったことは
次のご指摘でした。

一首を作り上げていく過程で、どうしても
身近な小さな世界に着目して作ってしまいが
ちだが、その小さな世界は大きな世界につな
がっていることを感じて詠むことができるよ
うにしていきたい。短歌を詠む時に、どうし
ても意味だけにとらわれて、あれもこれもと
多くの意味をつめこみすぎてしまいがちであ
る。しかし、大事なことは、表記とリズムに
あるのだ。ひらがな・カタカナ・漢字のこと
を「表記」というのだが、この表記のバラ
ンスを大切に、歌を作っていくべきである。

土くれをたたかぬ程の雨降りて露草の藍
清しく開く 塩川立子

一人居の雛の夕べを煮る貝のかそけき音
す口開く時 梶山良作

許容量越えて毀れしこのからだ初めて気
付く小さき器 小野さと子

覚えてゐたつもり言葉が出てこないケ
チャップの瓶を逆さまに振る 前田鐵江
子雀を逃がしひいなが撒き散らしどじの
犬君め いかに老いしか 伊藤 純
思い切り蕪を間引いていく我を迷いて遅
い夫が見ている 山田純子

雛壇の雛に声かけ子の発てり自立の暮ら
し始まる朝 福西美枝子

トースターのゴングのやうに鳴る朝夫と
の一日ゆるり始まる 宮川良子

蓬摘み籠いっぱい溢れさせなほも摘み
ゆくあればまた摘む 飯泉千春

花ごとに色目の違うはちみつのサンプル
見つつ人を思えり 石川義倫

松平先生は一首ごとに時間をかけて丁寧に
細かく講評してくださいました。右の作品は、
松平先生の選に入った十首の作品です。上の
句から下の句へのつながりがスムーズであつ
たり、詠んだ人を楽しくさせるようなユーモ
アのある作品など、選ばれた歌には独自の素
晴しい世界を感じることができました。誰が
読んでも理解できる作品を作る。一番大切だ
けれども、難しいことのように思いました。

「雛の宴」という展示を見て来たばかりだ
つたので、松平先生のお雛さまに面差の似て
いらつしやることに見とれながら話を聞いて
いました。短歌人口は減少の傾向にあるが、
「うた」の魅力を周囲にも広げて詠みつなげ
て行くことの大切さを熱く語る先生の言葉に
うなずきながらの「雛の歌会」でした。

(本会会員 勝又十枝)

文 化 講 座

山頭火の白い道 ～ うしろすがたのしぐれてゆくか ～

日 時 平成22年9月4日（土）午後2時～4時
講 師 渡 邊 紘 氏（元高等学校校長）



初心者のための短歌講座（午前）

牧水記念館短歌会（午後）

日 時 平成22年4月～平成23年3月 毎月第2土曜日 午前・午後（全10回）
講 師 須 永 秀 生 氏



書 道 講 座

牧水記念館俳句会

日 時 平成22年4月～平成23年3月
毎月第3火曜日 午後（全10回）
講 師 成 田 真 洞 氏

日 時 平成22年4月～平成23年3月
隔月第4日曜日 午後（全5回）
講 師 榎 本 好 宏 氏



サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

牧水の自然空間に遊ぶー

「ピアノ演奏2題 &

ヴォーカル」

日 時：平成22年10月2日(土)

午後6時30分

出 演：杉山佳代 (ピアノ)

寺山みちこ (ピアノ)

服部礼子 (ヴォーカル)

鈴木三郎 (ヴォーカル)

来場者：82人



生誕200年

ショパンの夕べ「ピアノ & 歌曲」

日 時：平成22年12月18日(土)

午後6時30分

出 演：植松克之 (ピアノ)

植野 愛 (ピアノ)

鈴木江美 (ピアノ)

芹沢倫子 (ピアノ)

塩川嘉奈子 (ソプラノ)

来場者：100人

古楽コンサートシリーズ25

J.S.バッハの夕べ

～バロックヴァイオリン、

チェンバロのよる～

日 時：平成22年2月19日(土)

午後6時45分

出 演：杉山佳代 (チェンバロ)

桐山建志

(バロック・ヴァイオリン)

来場者：119人



平成 22 年度 事業 報告 書

総 会 (第24回総会) 平成22年 5 月 6 日(木) 午後 6 時～7 時
 理事会 第1回 (通算124回) 平成22年 4 月14日(木) 午後 7 時～8 時 5 分
 第2回 (通算125回) 平成22年 5 月 6 日(木) 午後 6 時55分～7 時
 第3回 (通算126回) 平成22年 7 月25日(日) 午後 6 時～6 時30分
 第4回 (通算127回) 平成22年12月 3 日(金) 午後 6 時～6 時55分
 第5回 (通算128回) 平成23年 3 月10日(木) 午後 6 時～7 時25分

会 報 第23号 平成22年 5 月15日発行
 館 報 第45号 平成22年 9 月15日発行
 第46号 平成23年 3 月15日発行

1 調査研究事業

- (1) 第11回「百草園牧水歌碑祭」(東京牧水会主催)

日 時: 平成22年 8 月22日(日) 正午
 会 場: 東京都日野市百草園 牧水歌碑前
 参 加 者: 金子安夫、勝又十枝、小出和夫、小関康江、
 芹澤則子、原 悦子、三宅芳則
- (2) 第60回牧水祭(宮崎県日向市主催)

日 時: 平成22年 9 月17日(金) 午前10時
 会 場: 日向市東郷町坪谷若山牧水生家裏牧水歌碑前
 及び牧水公園ふるさとの家
 祝電打電
- (3) 「牧水まつり」(牧水詩碑保存会主催)

日 時: 平成22年10月20日(木) 午前11時
 場 所: 群馬県吾妻郡中之条町 暮坂峠
 祝電打電
- (4) 第9回「若山牧水顕彰全国大会」(日向市、日向市教育委員会、日向市東郷町牧水顕彰会、あくがれの会主催)

日 時: 平成22年10月23日(土)～24日(日)
 場 所: 日向市中央公民館、牧水生家周辺
 参 加 者: 林茂樹、青木朝子、浅井治、勝又十枝、
 金子安夫、小出和夫、千野慎一郎、長澤靖夫、
 原 悦子、三宅芳則、大島葉子

2 第57回沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会

日 時: 平成22年10月 3 日(日)
 午前10時30分～午後 3 時30分
 会 場: 千本プラザ音楽ホール「松籟」
 講 師: 林田恒浩氏(「星雲」編集・発行人)
 応募短歌: 151首
 参 加 者: 86人
- (2) 碑前祭・芝酒盛

日 時: 平成22年10月17日(日) 午前11時～午後 2 時30分
 会 場: 千本浜公園 牧水歌碑前
 参 加 者: 387人

3 文学講演会及び文学講座等の開催

- (1) 文化講座「山頭火の白い道～うしろすがたのしぐれてゆくか～」

日 時: 平成22年 9 月 4 日(土) 午後 2 時～4 時
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 講 師: 渡邊紘氏
 参 加 者: 121人
- (2) 第23回「雛の歌会」

日 時: 平成23年 3 月 5 日(土) 午後 1 時30分～4 時30分
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 講 師: 松平盟子氏(「ブチ★モンド」主宰)
 応募短歌: 83首
 参 加 者: 59人
- (3) 初心者のための短歌講座

日 時: 平成22年 4 月～平成23年 3 月
 毎月第 2 土曜日午前10時～12時
 会 場: 沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師: 須永秀生氏
 参 加 者: 10回開催 延べ204人

(4) 牧水記念館短歌会

日 時: 平成22年 4 月～平成23年 3 月
 毎月第 2 土曜日午後 1 時30分～3 時30分
 会 場: 沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師: 須永秀生氏
 参 加 者: 10回開催 延べ123人

(5) 牧水記念館俳句会

日 時: 平成22年 4 月～平成23年 3 月
 隔月第 4 日曜日午後 2 時～4 時30分
 会 場: 沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師: 榎本好宏氏
 参 加 者: 5回開催 延べ143人

(6) 書道講座

日 時: 平成22年 4 月～平成23年 3 月
 毎月第 3 火曜日午後 1 時～3 時
 会 場: 沼津市若山牧水記念館会議室
 講 師: 成田真洞氏
 参 加 者: 10回開催 延べ89人

(7) 第21回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

募集期間: 平成22年 5 月21日(金)～9 月10日(金)
 応募短歌: 1,889首 (16校1,889人)
 入選短歌: 53首
 選 者: 青木朝子、須永秀生、杉山芳香、
 曾根耕一、星谷亜紀
 表 彰: 平成22年10月17日(日) 沼津牧水祭碑前祭にて

4 企画展示

- (1) 「中学生短歌コンクール」入賞作品展示

(成田真洞氏揮毫による特選歌10首、入選歌43首の短冊)
 期 日: 平成22年10月17日(日)～10月31日(日)
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 入 場 者: 222人
- (2) 平成22年度書道講座受講者作品展示

期 日: 平成23年 3 月16日(木)～3 月27日(日)
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 入 場 者: 116人

5 音楽イベント

牧水の自然空間に遊ぶ「ピアノ演奏 2 題&ヴォーカル」
 日 時: 平成22年10月 2 日(土) 午後 6 時30分
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演: 杉山佳代(ピアノ) 寺山みちこ(ピアノ)
 服部礼子(ヴォーカル) 鈴木三郎(ヴォーカル)
 来 場 者: 82人
 生涯200年ショパンの夕べ「ピアノ&歌曲」
 日 時: 平成22年12月18日(土) 午後 6 時30分
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演: 植野克之(ピアノ) 植野 愛(ピアノ)
 鈴木江美(ピアノ) 芹沢倫子(ピアノ)
 塩川嘉奈子(ソプラノ)
 来 場 者: 100人
 古楽コンサートシリーズ25「J.S.」バッハの夕べ
 ～バロックヴァイオリン、チェンバロによる～
 日 時: 平成23年 2 月19日(土) 午後 6 時45分
 会 場: 沼津市若山牧水記念館ラウンジ
 出 演: 杉山佳代(チェンバロ)
 桐山建志(バロック・ヴァイオリン)
 来 場 者: 119人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条

会員になろうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

（理事長）林 茂樹
（副理事長）杉山 光男 須永 英男
（理事）浅井 治 保坂 輝夫 田中 和男 金子 安夫 四方 一弥
八十濱俊一 杉山 芳春 長澤 靖夫 青木 朝子 星谷 昭子
（監事）杉山 重義 鈴木 弘行
（事務局）大島 葉子 伊藤早智子 近藤美智代 納谷 瑞穂

編集後記

三月十一日、前日の理事会が無事終了し、理事長から「会報」の編集準備の指示を仰いでいるそのとき、大きな揺れを感じ、急ぎ館を閉じさせてもらい、帰宅しました。大地震とそれに伴う大津波よって、東北・北関東全域に大きな被害が生じたことを知り、愕然としました。

お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災した皆さまにお見舞いを申し上げます。

本会発行の『牧水酒のうた』に解説をご執筆くださった佐佐木幸綱先生から「牧水の酒の歌」と題する玉稿を頂戴いたしました。感謝申し上げます。

昨年十月に日向市で開催された第九回「若山牧水顕彰全国大会」並びに長澤靖夫理事の素晴らしいプランニングによる「国東紀行」に参加させていただき、たのしく充実したときを過ごすことができました。長澤理事には、大会参加記録としての「紀行文」を寄稿していただきました。

恒例の「沼津牧水祭・短歌大会」と「雛の歌会」の講師には、それぞれ林田恒浩先生と松平盟子先生をお迎えしましたが、熱心に聴講していただき好評でした。

渡邊紘先生をお迎えしての牧水と山頭火をテーマとした文化講座も大好評でした。

今年度も様々な行事を企画しております。会員の皆さまのご参加をお待ちいたしております。

大澤敏夫事務局長が昨年七月末をもって退職された後、理事長はじめ役員の方々の叱咤激励を受けながら、何とか事務局長代行を務めて参りました。本年も変わらぬご支援をおねがい申し上げます。

（大島葉子）